

講演 二〇〇〇年六月二十八日開催

アラブ現代詩について

1

モダニティは幻想である、あるいは少なくともアラブ現代詩におけるモダニティは幻想である、そう、私は考えている。私たちは、六〇年代初頭からの四十年間、半世紀近くにもわたり、この幻想と、もうひとつの、近代国家という、これまた重要でありかつ危険な幻想を、生き続けてきた。現代詩の詩集は書店にあふれ、詩人たちは争って詩集を出版しているにもかかわらず、美の感覚には何の変化も起きていない。そう多くの人々は感じている。何という狂人たち!! あるいは、詩というものが、詩人が幻想で、それ以上でもそれ以下でもないのかもしれない。詩人自らも、編集者も、評論家も、読者も、出版社も、誰もが

ムハンマド・オダイマ(詩人)

(翻訳 武田朝子)

口を揃えて詩は危機に瀕していると言う。しかし、それなら、詩人たち、狂人たちよ、なぜ詩の創作などやめて危機とすつかり手を切つてしまわないのか。なぜ出版社は、たとえ詩人の自費であるにせよ、詩の出版などに同意するのか。またなぜ書店の主人は、売れもしない詩集で自分の店が埋まるのを黙っているのか、なぜ評論家たちは詩を読み続け、批評し続けるのか。アラブ世界では、誰もが、この詩、少なくとも現代詩という幻想に落ち込み、出口を見失っているかのようである。

2

六〇年代から九〇年代の初めまでの三十年あまりのあいだに、

表面的には、多くの変化が詩の分野で起きてきたように見える。古い韻律に替わる新しい韻律に始まり、詩に用いられる単語、言葉遣い、文の構造、イメージまで、こう言えば、あたかも古い詩の言語にかわって、新しい言語が生まれたかのように聞こえる。

しかし、では、いったい、どうして、この時代に書かれた詩を読むと、息がつまりそうな気がしてくるのか。六〇年代、七〇年代、つまり詩のモダンテイという幻想が頂点にあった時期

当時、私は大学生で、大学時代と卒業後もしばらくは、私もそれらの詩に対して情熱を燃やし、そのモダンテイ、新しさを擁護していたのだが、に書かれたパイオニア的詩人たちの詩は、今では非常に遠く、もはや何の意味もそこに見出せないと感じられる。この息がつまりような感覚は、彼らが八〇年代、九〇年代に入って書いた詩を読むとき、さらに強くなるのだが、いずれにせよ、彼らが過去に、また現在書いている詩に対してこのように感じるのは、決して私一人ではなく、私の世代に共通の感覚だと言つことができる。いったいなぜ、文壇やジャーナリズムで、*「偉大な」「輝かしい」「革命的」「革新的」*（このよくな見出しで多くの詩や評論が紙上に掲載された）とめてはやされたあれらの数々の作品が、*「ちっぽけで」「古臭く」「復古的」「つまり」「無意味な」*ものになってしまったのか。それらの作品は、確かに、古いものに対する革命であった、少なくともそれを意図して書かれたはずだったのである。

この窒息感の原因について考え始めると、正直に言つて、私は迷路に落ちいったような気持ちになる。批判すべきはパイオニアの詩人たちだろうか、しかし彼らは、革新や変化を真剣にめざしていたのではないか。あるいは、問題は、言語の構造や文化にあるのか、つまりアラビア語やアラブ文化、あるいは一般にどんな言語文化であつても、言語構造や文化というのは、このような短いタイムスパンの変化を受けつけるようなものではないということか。言語や文化の中でもっとも価値があり、いわばそのアイデンティティとも言えるものが詩とその世界であることを考えれば、それももっともだと言えるかもしれない。私が革新や変化というものを望み、詩や詩人に対して大きな希望を抱いてきたこと自体が誤りなのか。あるいはパイオニアたちの詩に対する私のこのような見方、診断が、*「誤診」*なのか。

おそらく、今述べたようなことは、いずれも多かれ少なかれ正しいだろう。とにかく確かに言えることは、言語や詩における革新の闘いとは、容易なことではなく、一人や二人の詩人が二十年や三十年で成し遂げられるようなものではないということだ。しかしまさしくそのことを、パイオニアたちは忘れてしまったのである。ジャーナリズムに*「モダンテイの詩人たち」*などともちあげられただけで、戦いに勝つたつもりになつてしまつていた。彼らは、古い時代を乗り超えて前進することにあまりにも夢中になつていたのかもしれない。彼らは、古い韻律を打ち破り、新しい韻律で詩を書くことが、文化を丸ごと変革

することになるだろうと信じ、詩の革新が社会全体の革新を導き、近代国家の建設につながっていくと本気で考えていた。このような幻想を抱いた詩人たち、そして詩人とともに社会全体が、後になって、つまり今日、高い代償を払うことになった。

3

「パイオニアと彼らに続く詩人たちの作品がもたらす、このような窒息感の原因は何か」、「社会政治状況は、六〇年代初期から、少なくとも表面的には大きく変わってきているのに、現代詩が同じところで足踏み状態になっているのはどうしてなのか」、「このような問いが、八〇年代初めから、現代詩に対するいくつもの問いの一つとして、繰り返し問われるようになった。このような危機的状況の原因はどこにあるのか。

これに対して、そもそも危機は、そのような問いを持ち出す人間たち、批評しか能がなく、物事を悲観的にみる人間たちの頭の中にあるだけで、実際には存在していないのだという反論もある。これは「革命の詩人」、「抵抗の詩人」、「人民の詩人」（社会主義、共産主義の立場にたった詩人たちを指してよく使われた表現）たちの意見であり、彼らは、現代詩はうまくいっている、自分たちの貢献により現代詩はおおいに前進した、自分たちは詩と政治において「革命」を成し遂げたのだと考えている。

あるいは、詩というものが危機なのであり、危機をばら

まない詩など存在しない、なぜなら存在や人生というものがそもそもそれ自体危機である、という言い方もある。このような考え方の詩人たちをここではリベラリストと呼ぶことにするが、彼らリベラリストたちは、詩におけるモダニティを理論と創作の両面で追求してきた。実は彼ら自身、今日では自らのしてきた仕事に対して失望を感じるようになってきているのだが、対外的には、現代詩はうまくいっており、自分たちが現代詩を変え、前進させたのだと言い続けている。

しかし、現代詩の危機、と私が言うときの「危機」は、彼らリベラリストたちが言うところの危機とは、決して同じ意味ではない。私が危機という言葉で言おうとしているのは、次のようなことだ。似通った詩が大量に書かれ、一つ一つの詩を区別するような特徴がないこと、詩を一つ読めば、その他のすべての詩を読んでも同じであり、何人かの詩人の詩集を買って読んでみても、これといった違いがなく、同じようなテーマが同じように扱われ、イメージも表現も似たりよったりで、まるで一人の詩人がいくつもの名前を使って書いているような気がしてくること。「小物」の詩人たちは「大物」たちを真似、「大物」同士は互いに模倣しあい、古い過去の詩を真似る、そして誰もが、抽象度の高い詩ほど高尚な詩だという考えに囚われていることなのである。

抽象は、クルアーン（コーラン）と結びついており、アラブ詩は古いものも新しいものも、すべてクルアーンの懐から生まれている。クルアーンは、アラブ文化における芸術的想像力の形成に非常に大きな役割を果たし、また今も果たし続けている。詩であるうと散文であるうと、およそアラビア語の言語表現というものは、千四百年近く前つまり西暦六二二年のイスラームの始まりから今日まで、クルアーンという宇宙のもとにある。クルアーンの言語は、非常に高度の暗喩を特徴とした、究極の抽象であり、クルアーンとともに言葉は地上から天上にのぼった、二本の足から頭に移った、そして言語は、"メタ"言語に変わったのだということが出来るだろう。クルアーンはアラブ文化における最初のメタフィジックであり、アラブは、言語に關しては、クルアーンとともに、感覚の経験から、頭の経験に移行した。クルアーンは出典、記憶をもたないテキストであり、クルアーン以前、つまりイスラーム以前の豊かな記憶の世界を否定し、それ以後今日にいたるまでの芸術、とりわけ詩のテキストにとつての記憶となつたのである。クルアーンとともに、アラブはテントから空へのぼり、のぼったきり降りてこない。それ以来、抽象の度合いをより高めること、言葉の翼で飛ぶことのみ専念し続けてきた。

アラブは、この天から降りてきた神のテキストに、非常な劣等感を抱くようになり、そのためこのテキストに何らかの形でつながるような書き方、過去と断絶した創作を常に目指すようになった。現代のアラブ詩の運動も、意識的あるいは無意識的に、このような方向を追求している。現代詩のテキストは、記憶をもたず、"切り離され"、外部に出典がないものであるうとしてきた。しかし現実はそのような意図とは異なり、真に独立して空白の中に立ち、あらゆる源からの断絶をなし遂げた詩など、ほとんどない。現代詩の旗手たちの誰も、古いクルアーンのメタフィジカルな世界観やもの見方をのり超えることはできなかった。偉大なパイオニアたちは、新しい記述の様式を生み出すことはできなかったのである。

5

クルアーンとともに、詩的創造は、抽象と平行して歩むようになった。詩人は、事物をそのものとして見ずに、頭を通して見るようになった。詩人は、事物を、何か他のもののためでなくそれ自体としてみる力、事物と交流し、ともに呼吸し、ありのままに表現する力を失った。アラブの詩人、特に現代詩人にとつて、詩的眞実、あるいはすべての眞実は、もし眞実などというものがあるとすればだが、もはや、触れることができ、

目で見、耳で聞くことができるものではなくなり、その背後にあるものとなった。

この「背後にあるもの」こそ、スーフィズム（神秘主義）のテキストがつかまえようとし、事物や世界を極度に抽象化する知の言語によって表現しようとしたものだった。このような努力の延長線上に、後世のメタフィジカルな詩人たちが連綿と連なっているのであり、現代のアラブ詩の運動も位置付けることができる。彼らにとって、革新とは、抽象の度合いを、クルアーンやスーフィズムのテキストと同じやり方で、どんどんあげていくことに他ならない。

このような性格をもったアラブ現代詩の運動は、一九五〇年代、六〇年代に起きた三つの大きな流れでとらえることができる。『アルアーダーブ（文学）』誌は一九五二年に創刊され、今日まで続いている。『シャアル（詩）』誌は一九五七年創刊で一九六四年に廃刊になり、そのバックナンバ―は若い世代にとっては今ではメッカのような存在となっている。『マワーキフ（立場、状況）』誌は一九六八年に創刊され八〇年代後半以降は発刊されていないが、これもバックナンバ―はメッカ的存在となっている。これら三つの文芸誌は、詩の運動の方向付けにはかりしれない大きな影響を与え、九〇年代に入ってから、アラブ各国での新聞や現代詩専門誌の爆発的な発行につながっている。つまり、これら三つの文芸誌から、アラブ詩のモダニズムという幻想が始まり、六〇年代、七〇年代、そして八〇年代

の少なからぬ部分で影響力をもった詩人たちはみなここから誕生しているのである。彼らの多くが、自分こそ、詩のモダニズムの父であり、旗手であり、「新たな詩のクルアーン」あるいは「新しい詩の聖書」を手にした預言者だと主張している。

『シャアル』と『マワーキフ』の二誌が発したスローガン、「詩の過去との断絶」、「個人的体験の表現の自由」、あるいはそのほか詩人の頭に浮かんだありとあらゆるスローガンと、彼らが実際に書いて、三つの文芸誌やその他の場に発表した詩とは、実はまったく別物だった。彼らの望みをたとえわずかでも表現するような詩、つまり事物の見方や言語の構造において詩の過去の遺産からの解放を訴えるだけの力をもった詩はほとんど見られなかった。個人的な体験を表現し、そこから詩人の肉體のにおい、詩人のインクのおいを嗅ぎ取ることができるような詩は、うまれなかったのである。

さらに『アルアーダーブ』誌の詩人たちになると、彼らは、自分たちは遺産を引き継ぐものであるが、ただ、遺産にちよつと手直しし革新を吹き込むのだと公然と語っていた。彼らは、『シャアル』、『マワーキフ』の二つの理論的な雑誌の主張する詩のモダニティや革新が、アラビア語とその遺産を足元から揺り崩してしまうだろうと信じ、ジャーナリズム上で論争を展開した。しかし、その論戦は、ほどなく静まってしまった。というのも、現実にはとるにたる変化は何一つ起きず、結局みな同じ土俵の上、抽象というひとつの大きな城の中にいるのだと

いうことを、いずれの勢力もが悟ったからである。そしていずれの勢力も、現代詩の革命が成し遂げられたとして、停戦合意した。その合意は、いわば同時に勝利で敗北だったと言えるが、実は、彼らの間の争いは、詩の戦争、芸術上の闘いではなく、時には国家間、また時には宗派間、そして大部分はイデオロギーの対立だったのである。

6

現代アラブ詩人は、『アルアードゥブ』のようなニユークラシクにせよ、『マワーキフ』のようなモダニストにせよ、その存在は、父親の人格から独立して自分の道を見出すことができないう子供にたとえることができるだろう。ニユークラシクもモダニストも、過去に祖先を見出し、これを擁護している……過去の大使であるという信任状をいつもぐら下げ、古びた武器で戦っている。ただ、モダニストは古い武器を構造はそのままに色だけ上塗りして使っており、一方ニユークラシクは、色さえ塗らないで使っている、違いはそれだけで、いずれも過去の兵隊であることには変わりはない。

そしてニユークラシクは、自分たちの祖先として、過去の歴史の中で支配的だった文化を選び、一方モダニストは、異端とされていた者たちを祖先としているという違いはあるが、過去にさかのぼって自分たちの正当性を見出す点は同じといえる。

あるいは、ニユークラシクのほうが、モダニストより自己と調和していると言えるかもしれない。モダニストは、過去との断絶を標榜しながら、自身の内部では、特殊な文化的歴史に、例え細い糸であっても、つながりを求めようとしており、そうやって大きな矛盾を生きている。矛盾というものが、世界共通のモダニズムの特徴の一つであるとするならば、この点のみにおいては、彼らは、紛れもなくモダニストだと言えるかもしれない。

ニユークラシクは、自分たちが過去の大衆文化につながるものだと言明しており、一方の『モダニスト詩人』たちは、その大衆文化を、外側の『表皮』であり創造性のないものとみなし、自分たちこそ、文化の核心、かつて禁じられ、エリートの中のエリートだけのものだった、彼らが言うところの『本質』『根本』につながるのだとしている。これらが、自らがアラブの遺産の一部であることを証明しようとして現代詩の運動がつかんだ伝統であり、そしてその一部とは、ありふれた部分ではなく、スーフイズムのように非常に特殊な部分であった。

そういうわけで、現代詩は非常に難解、抽象的であり、あたかもモダニティとは「誰でも望むものが、というわけにはいかないのだ。特別に創造的で、例外的な人間だけが 預言者、スーフィー、そして現代詩人が！ 詩の歴史上の、偉大な創造者たちの名前に連なることができるのだ」と言っているかのようである。現代詩人とは、現在とつながり、現代と等身大

に生きる力をもつ者ではなく、特定の過去とつながり、詩的創造の歴史のうえで偉大な人物たちと肩を並べることができる者だ、ということになる。「お前は、天才でも、例外的でも、創造的でも、魔法使いでも、占い師でもないから、過去の偉大な詩人たち イムルー・アルカイス、アビー・タンマーム、ムタナッビー、アルニッファリー（いずれもイスラーム以前あるいは八〜九世紀のスーフイズムのアラブの詩人たち）、ランボー、ボードレール、マラルメ……らと並ぶことはできない」。今日のあらゆる創造は、過去の、しかも非常に遠い過去の創造と同じやり方と水準でなされなければ意味をもたない。言葉を変えれば、天才、魔法使い、占い師でなければ、模倣でさえ、成功することはできないというわけだ。これが、モダニティの矛盾した伝統であり、アラブ現代詩のモダニズム運動の明白な譲歩なのだ。この運動が示し擁護したモダニズムとは、このような「巨人たち」の名前に匹敵するという他にならず、巨人たちのテキストと同水準に達していないテキストはすべて、モダニズムや、創造や、偉大な詩とは、およそ無縁なもの、ということになる。このようにして、アラブ詩のモダニズムは過去にたつて自らを擁護した、つまり自分自身の内部にはなく、その外に根拠を求めた。革新のために過去と断絶すると宣言したにもかかわらず、遺産の中につながりを見出し、そこへの帰属を宣言したときのみ、自らを正当化できたのである。

「過去への回帰」、本質への回帰、「理想」、「無垢」、「子供

時代」、「原点の純粹性への回帰」これらは、現在には本質ではなく、理想でなく、無垢でなく、子供らしさをもたない、ということ前提に言われているわけだが、これらの回帰こそ、アラブ現代詩の運動が依り所とした原則の一つだった。ある詩人は、言語をその初期の無垢さに帰そうとし、またある詩人は「源」に戻ろうとし、あるいはまた別の詩人は本来の素朴さにかえろうとする……誰もが何かに回帰しようとするのである。

こうなると、モダニティとは、この「汚れた」現在にあるのではなく、未来にでもなく、時の流れや現在に犯されることのない不変の根本への回帰にあるということになる。世界は古くそこには不変の本質があるという考え方は、原理主義的な宗教思想の特徴に他ならない。このような考え方にたつて、モダニズムの詩人たちは、詩におけるモード（流行）、つまり現在の素朴な事物が現れているような詩を攻撃する。モードは移り変わり変化していくものだから、というのがその理由である。しかし詩人たちは、宗教的知識人たちも、服装や食べ物、飲み物などについてはモードを追いかけている。要するに、彼らパイオニアたちのめがねにかなわない詩はすべてモードの詩、一過性で、永遠性をもたず、忘れられていく詩だということにされるのだ。しかし、忘却のない歴史があるだろうか！ それはまるで、時のない歴史、時を、現在を否定する歴史ということではないか。彼らは言うだろう、「著述の世界以外でなら、モードも悪くない。が、書くということとは創造であり、創造とは垂直

な時間に潜っていくことである。モードは、流れ去っていく水平な時間の水面で泳ぎ回っているようなものだ。しかしモードもモードなりの創造であり、創造には不変の本質、不変の形などというものはあり得ない。そのようなものは、形而上的な人間たちの頭の中にしか存在しないのであり、その点は、ニユークラシックもモダンストも同じだと言えるだろう。

アラブ・モダンイズムの詩人たちの多くは、政治的な関心や帰属をもっており、それが芸術的関心以上に彼らを著述にかりたてていた。彼らは芸術用語の辞書にも増して、宗教用語あるいは政治用語の辞書に精通しており、政治的、宗教的な用語を詩の分野に投影させた。五〇年代初頭の植民地主義からの解放が叫ばれた時代には、韻律の束縛からの解放が、国家や民族の統一という政治用語が多用された時代には、詩や詩集の有機的な一体性（まとまり）が、市民の自由に対しては詩人の自由が、天才的で偉大なる政治指導者に対しては天才的詩人、ということが言われた。このような対は、あげていけばきりがない。アラブ・イスラーム世界の人々を支配した、そしていまだに支配している、政治的・宗教的発想は、アラブ・イスラーム世界の詩の分野にも同時に見出されるのであり、前者が国を、後者が詩を統治している。政治家が、祖国の独立、植民地支配からの開放、祖国の統一、市民の自由が実現されたという幻想を抱いたように、現代詩人は詩的過去から独立し、芸術における統一を実現したという幻想を抱いた。政治家は自分が近代国家

を実現したと信じ、現代詩人はモダンな詩を書いたと信じたのである。アラブの政治家は、アラブの政治的過去と西洋の政治によって疎外され、現代のアラブ詩人は過去のアラブ詩と西洋の詩によって疎外されている。ここに危機がある……アラブの現在だけが、不在であり、意識的、無意識的に否定され続けているのだ。

7

詩におけるモダンティイは、少なくとも部分的にでも実現されていなければならなかった。それができなかった原因は、アラブ社会を圧倒的に覆い尽くしている一神教的形而上的文化にある。この文化は、異質なものが自らの傍らに発生することを容易には認めず、最大限寛容になったとして、片目で、そして非常に極端な視線で新参者をにらみつける。アラブの詩人は、時代を問わず、意識しているにせよしていないにせよ、この文化に完全に囚われているといわざるを得ない。これは、中世ヨーロッパを支配し、そのために何百万という人間が死んでいった文化であり、その本質は、不可視のものや理想への呼びかけと、五感で知覚されるものの排除にある。

このような文化のもとの創造も、当然、同じような思想や知的生産の方法に支配されたものとなる。アラブの詩人はイスラーム誕生以来今日に至るまで、人間個人としての経験につい

て語らず、誰にも共通する一般的な知的経験についてのみ語ってきた。イスラーム以前の詩人がしたように、個人としての自己について語ることはせず、書物や理論から学んだ頭の中にある知について語った。したがってその詩は一般的で、命や鼓動に欠け、屍のような詩である。そこには目で見ただけのままで美は現れず、すべてはメタフィジカルなめがねを通されている。詩人は、オアシスや海や川、木を形而上学の許可証なしには染めなくなってしまう、五感で知覚されるものを剥きとり、メタフィジカルな枠の中で知的に再構築せずにはすまなくなっている。それが事物を本質へ、根本へ、純粹さへ回帰させることであり、その重要な役割をはたす者が、存在や美の本質に到達する、というわけだ。

たとえば、海を例にとるなら、海はメタフィジカルな詩的な知によってシンボル化され、宗教的、哲学的、あるいは政治的思想と同水準のものになったとき、はじめて純粹で、清らかで、美しいということになる。木は、詩人が、より高度な観念に、創造上の木に回帰させたときにのみ、真の木となり、美となり、存在となる。このようにして詩は一気に、幻想的観念や目に見えないものから始まって、頭の中で空回りする、眼に見える海や木は姿を消し、抽象化された言葉からなる別の海、別の木が現れるのである。

パイオニア詩人たちが、彼らの試みを離陸させた時、彼らは強い使命感を抱いていたあまり、自分たちが、ユダヤ教、キリ

スト教、イスラームと、加えて古代ギリシア哲学からなる一神教のメタフィジカルな文化の子孫であるということを忘れてしまっていた。しかしこのような文化とつきあい、これをのり超えようとする、あるいは少なくともこれと袂を分かとうとするのは、容易なことではない。私に言わせれば、彼らは、無意識のうちにもこのような文化の土台、根本に足をつけたまま、自己からの分離がもたらすであろう衝撃を恐れながら、離陸した。

そのため、一九五〇年代、六〇年代に西洋文化と出会ったとき、当の西洋文化はメタフィジカルな特徴をすでにすっかり捨てていたにもかかわらず、自分たちアラブの性格と共通するものだけをそこからとりこんだ。自らと異なるものは取り入れず、自分たち自身やアラブの遺産がその中に見出だせるもの、自分たちを映し出す鏡、自分たちに理解できるものだけを読みとった。彼らは多様性というものの提唱者であったにもかかわらず、詩や評論の翻訳、西洋との接触は、自分たちや自分たちの伝統の革新とかビジョンの転換のため以上に、彼らの「モダンニティ」の正当性を確実なものにするためになされた。あるいは彼らは、ボードレールやランポー、T・S・エリオットたちのライバルの作品にふれ、アメリカやヨーロッパにおける詩の反モダンニズム論を読み、西洋の詩のモダンニズムの終わつたところから出発すればよかったのかもしれない、なぜなら、アラブ・イスラーム文化とヨーロッパ・キリスト教文化にはその根本で共通するものが多いのだから。

彼らは西洋文化に自らを映し出す鏡を求めたので、アドニス
一九三〇年に生まれ、現在、アラブ詩のモダニズムの最も
重要な理論家であり、またもっとも重要な詩人 にとつては
『アラブ詩序論』の中でアラブの詩人と西洋の詩人、アラブの
詩の運動と西洋の運動を並べて見せるのは、容易なことだった。
「アブー・ヌワースはアラブのボードレルである」「アビー・
タンマームはアラブのマラルメ」「ランボーはアラブのスー
フィー」、そして最後にスーフイズムとシュレーアリズムを並
べてみせる。詩のモダニティはヨーロッパより十世紀も前にア
ラブから始まった、あるいは我々アラブの古い詩人、とりわけ
八〜九世紀の詩人たちはランボーやボードレルと同じように
モダニストであり同時代的である、と言わんばかりである。

このような比較の背景には、この世界を、一つの本質が多様
な形をとつてあらわれたものにとらえ、存在の変化というもの
を深いところでは信じないという形而上学的なものの見方があ
る。このような見方にとつては、これらの数多くの詩人たちの
名前も、一つのもの、すなわち根本や理想のマニフェステーシ
ョンに他ならない。

アラブ現代詩の旗手たちは、彼らの形而上的な「信条」を揺
さぶり動かすような可能性をもつたもの、この時代の預言者と
なるといふ彼らの夢、詩人は預言者あるいは占い師、魔法使い
でなければならぬという信仰から、彼らの眼を覚まさせるよう
なものには近づこうとはしなかった。詩人たちは、先を争って、

預言者、占い師、魔法使いになろうとし、人間であることを忘
れてしまった。この預言者をめざしての競争でさえ、決して新
しいものではなく、アラブ、イスラームの伝統だと言える。イ
スラーム以降のアラブの詩人は誰もが預言者になることを夢み
てきた。また、彼らは、目に見えるものや現在を裏切ることで
も先を競い、そのようにして単に詩人であるばかりでなく、偉
大な詩人、天才、創造者になろうとしてきた。

「詩人という言葉だけでは物足りない、これらの形容詞がど
うしても必要だ！眼に見えるものを裏切り、現在を裏切つては
じめて、不可視のもの、偉大な過去、偉大な未来に届くことが
できる!!」これが、アラブ現代詩の運動を支配してきた掟
であり、そのために、詩人たちは、詩に書くことができるよう
な思想を何よりも優先して選び、人間がこの世界のもっとも重
要な要素であるという見方を捨ててしまったのだった。